

子どもの関係性攻撃に関する研究の展望

磯部 美良

(2001年9月28日受理)

A review of studies on children's relational aggression

Isobe Miyoshi

This article provided an overview on children's relational aggression, which is defined as a behavior that harms others through damage (or the threat of damage) to their peer relationships (e.g., angrily retaliating against a peer by excluding her/him from one's play group). It was suggested that (1) longitudinal research should be conducted to enhance our understanding of developmental manifestations of relational aggression, stability of relational aggression, and the relation between relational aggression and social-emotional adjustment, (2) as relational aggression has unique nature and functions, a reconsideration of past theoretical and empirical models of aggression is warranted, and (3) research of intervention with relational aggressive children is needed.

Key words: Relational Aggression, Children

キーワード：関係性攻撃，子ども

1. はじめに

学校現場において、いじめは依然として深刻な問題であり、国内外のいじめに関する実証的研究は飛躍的に増加している。これらの研究によると、いじめの形態には性差がみられ、男子は叩く・蹴るなどといった暴力的ないじめが多く、女子は無視・仲間はずれといったいじめが多いという（児童生徒の問題行動等に関する調査研究協力者会議，1996；神村，1997；Olweus，1993）。こうした女子に多くみられる無視・仲間はずれといったタイプのいじめの理解につながるものが期待されている概念に、関係性攻撃(relational aggression)がある（松尾，2000）。関係性攻撃は、女子の攻撃性についての理解を深めるために、1990年代中頃に、米国の研究者であるCrickとその共同研究者によって提唱された概念である(Crick & Grotpeter, 1995)。それ以前にも、こうした攻撃形態が女子に顕著にみられるといった知見は、得られていた(Cairns, Cairns, Neckerman, Ferguson, & Garipey, 1989; Feshbach, 1969; Feshbach & Sones, 1971)。しかし関係性攻撃の概念が提唱されて以来、Crickとその共同研究者を中心に、攻撃性の性差だけではなく、関係性攻撃を頻繁に行う子どもの行動的・認知的特徴

や社会的適応状態についての体系的な研究が行われるようになってきている。

本稿では、関係性攻撃の最近の研究動向に焦点を当てながら、特に幼児・児童の関係性攻撃を対象にした研究の動向を概観し、これらの研究の今後の課題を明らかにしたい。

2. 定義

関係性攻撃の概念を提唱したCrick, Werner, Casas, O'Brien, Nelson, Grotpeter, and Markon (1999)は、関係性攻撃を「受容関係や受容感、友人関係、または集団への仲間入りに危害を加えること（またはその脅し）によって、他者を傷つける行動」と定義している。関係性攻撃の例として、Crick and Grotpeter (1995)の作成した小学生用の仲間評定による質問紙の尺度項目をTABLE 1に示す。Crick et al. (1999)によると、関係性攻撃は仲間関係に危害を加えることを意図した攻撃行動であるため、叩く・蹴るといった暴力を攻撃手段として相手の身体に危害を加える身体的攻撃とは区別される。また、関係性攻撃の多くは言語的なものであるが、関係性攻撃はあくまでも関係に焦点を当てた攻撃行動であるので、悪口を言う

といった言語的攻撃とも区別される。

TABLE 1 関係性攻撃の尺度項目
(Crick & Grotpeter, 1995)

ある子に対して腹を立てると、仕返しのためにその子を仲間はずれにする
「言うことを聞かないと、嫌いになるよ」とおどす
ある子に対して腹を立てると、その子を無視したり話しかけるのをやめたりする
活動や遊び時間に、ある子を自分のグループに入れられないようにする

さて、関係性攻撃と類似した概念に、間接的攻撃(indirect aggression)がある。Bjorkqvist, Osterman, and Kaukiainen (1992)は、間接的攻撃を、「ある種の社会的操作(social manipulation)」であり、「攻撃に直接関わることなしに、相手を攻撃するために他者を操作するか、または、ターゲットの人に危害を加えるために社会的構造を利用すること」と定義している。

また、もう1つ関係性攻撃と類似した概念として、社会的攻撃(social aggression)がある。Galen and Underwood (1997)は、社会的攻撃を、「他者の自尊心や社会的地位、またはその両方に危害を加えることを意図した攻撃」であり、「言語的拒絶、ネガティブな表情、または体の動きといった直接的な形態をとるか、または、中傷的なうわさを流したり仲間はずれにしたりとといった間接的な形態をとる」と説明している。

FIGURE 1は、これら3つの概念の関連をまとめたものである。ここに示したように、「仲間はずれ」のような友人関係を操作することによって間接的に相手に危害を加える行動については、これら3つの概念は共通している。しかし、関係性攻撃を基準に他の2つの攻撃行動をみても、1) 間接的攻撃はその名の示す通り、被害者や周囲の人に誰が攻撃の首謀者であるのかを知られないように、あくまでも“間接的”に行われる点に重点が置かれている。したがって、関係性攻撃に含まれる被害者に対する直接的な攻撃行動(「言うことを聞かないと、嫌いになるよ」とおどす、など)は、間接的攻撃に含まれない、2) 間接的攻撃の尺度項目には、「ある子の陰口を言う」という言語的攻撃が含まれている、3) 社会的攻撃の定義及び内容(ネガティブな表情、身振り手振りなど)は、別の攻撃行動としても解釈可能である。したがって、関係性攻撃は、直接・間接に関わらず、関係を攻撃手段とする攻撃行動を全て含んでいる概念であるといえよう。

本稿では、米国を中心に展開されている関係性攻撃の研究について論じる。ただし、間接的攻撃や社会的攻撃の研究についても、関係性攻撃との重なりがかな

り認められるため、併せて考察する。

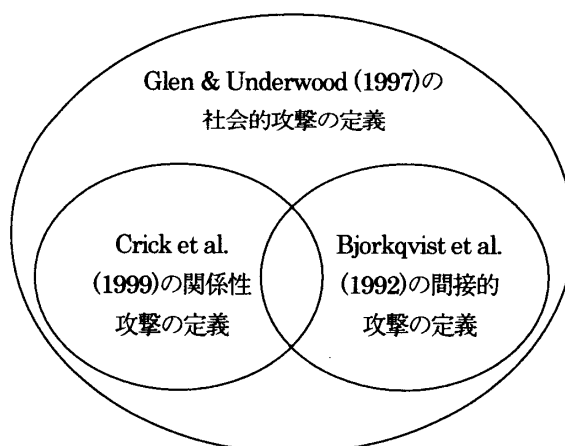


FIGURE 1 関係性攻撃とそれに類似した概念の関連

3. デモグラフィック要因

デモグラフィック要因としては、性差、発達差、社会経済的地位と関係性攻撃の関連について調べたものがある。

(1) 性差

関係性攻撃(またはそれに類似した攻撃行動)の研究は、Feshbachら(Feshbach, 1969; Feshbach & Sones, 1971)まで遡ることができるが、当時からの一連の研究の関心は、攻撃行動の性差を検討することであった。すなわち、女性は攻撃的ではないという見方が主流を占める中で、女性は攻撃的ではないというよりも、女性の顕著に示す攻撃形態が男性のそれとは異なっているという仮説を検証することが、これらの研究の主要な目的とされてきた。

幼児・児童を対象とした関係性攻撃と性差の関連を取り扱った研究では、一部、性差の認められなかった研究もあるが(Rys & Bear, 1997)、ほとんどの研究では、女子の方が関係性攻撃を頻繁に示すことが確かめられている(Cairns, Cairns, Neckerman, Ferguson, & Garipey, 1989; Crick & Grotpeter, 1995; Feshbach, 1969; Feshbach & Sones, 1971; Galen & Underwood, 1997; Lagerspetz, Bjorkqvist, & Peltonen, 1988)。

また、以上の研究結果は、関係性攻撃得点の平均値の男女比較によるものであるが、関係性攻撃と身体的攻撃の高低群を組み合わせることで4つの群を構成し(関係性攻撃群、身体的攻撃群、関係性攻撃 + 身体的攻撃群、非攻撃群)、その男女比を調べた研究もある(Crick & Grotpeter, 1995; Rys & Bear, 1997)。例えばCrick and Grotpeter (1995)は、仲間指名による得点が平均

値より1SD以上の対象児を高得点群としたときに、関係性攻撃群には女子が(女子17.4%, 男子2.0%), 身体的攻撃群には男子が(女子0.4%, 男子15.6%)多いことを明らかにしている。また、関係性攻撃 + 身体的攻撃群には男子が多い傾向(女子3.8%, 男子9.4%)があるが、非攻撃群の男女比はほぼ同率(女子78.3%, 男子73.0%)であったという。この結果は、関係性攻撃を加えると、女子は男子とほぼ同じだけの比率の子どもが攻撃児として識別されてくることを表している。また、関係性攻撃の観点からすれば、女子は男子以上に攻撃的であることを示しているといえよう。なお、関係性攻撃の平均値では男女差の得られなかった Rys and Bear (1997) でも、同様の結果が得られている。以上の結果から、関係性攻撃は女子に顕著な攻撃行動であるといえよう。

では、なぜ関係性攻撃は女子に顕著にみられるのであろうか。例えば、Lagerspetz et al. (1988)は、1)女子は男子以上に直接的攻撃(身体的攻撃)を行うことを社会的に禁止されているため、その代わりに、間接的攻撃を発達させる、2)男子よりも早く社会的スキルの発達する女子では、発達早期から関係性攻撃が可能になる、3)女子の仲間関係の構造が関係性の攻撃を促進している、など3つの仮説を立てている。また、Crick and Grotpeter (1995)は、攻撃形態と同性集団内の社会的目標との関連を指摘している。すなわち、男子集団の目標は身体的優位性であるため男子は身体的攻撃を用いる傾向がある。それに対して、女子集団の目標は他者との親密なつながりを確立することであるため、女子は関係性攻撃を用いる傾向があると説明している。

(2) 発達差

関係性攻撃の発達については、次のような研究が報告されている。例えば、朝生・斎藤・荻野(1991)は、保育園の2歳児クラス11名を対象に、物の所有に関するいざこざ場面を観察している。その結果、5月頃(平均年齢2才7ヶ月)には「身体攻撃」や「物を取って逃げる」、「やだ」などの言語的抵抗が見られるが、10月頃(平均年齢3歳0ヶ月)になると、「貸してくれないと、遊んであげない」「仲間に入れてあげない」といった、関係性攻撃と思われる行動が出現することを報告している。また、Crick, Casas, and Mosher (1997)は、年少児(3歳6ヶ月~4歳6ヶ月)と年中児(4歳6ヶ月~5歳6ヶ月)とで、関係性攻撃に有意な年齢差はないことを明らかにしている。また、年中児(平均年齢5歳4ヶ月)と年長児(平均年齢6歳4ヶ月)についても、関係性攻撃に有意な差はないという結果が得られている

(磯部・佐藤、投稿中)。以上の結果から、関係性攻撃は幼児期という早い段階から存在することが明らかであり、関係性攻撃の発生に対する親のしつけやきょうだいの影響が示唆される(朝生 他, 1991; Crick et al. 1997; 畠山, 2000; 磯部・佐藤, 投稿中; Mcneilly-Choque, Hart, Robinson, Nelson, & Olsen, 1996)。

しかしながら、8, 11, 15, 18歳の児童・生徒を対象に、間接的攻撃の縦断的な発達の傾向を調べた Bjorkqvist et al. (1992)は、間接的攻撃は8歳児ではほとんど見られなかったとし、矛盾する調査結果を報告している。おそらくこの結果は、Crick et al. (1999)の指摘するように、間接的攻撃には直接的な攻撃行動が含まれないことに起因していると思われる。すなわち、年少の子どもが見せる比較的単純で明白なタイプの攻撃行動(例えば、「貸してくれないと、遊んであげない」と直接相手に言う場合は、Bjorkqvist et al. (1992)では捉えられていないのである。なお、11歳以上では、身体的攻撃は減少しているのに対して、間接的攻撃はどの年齢群においても頻繁に見られることが示されている。このことは、児童期以降も、「噂やうそを広める」や「仕返しとして別の子と友達になる」などといった間接的な形態の攻撃行動は持続することを意味している。

(3) 社会経済的地位(SES)

関係性攻撃と社会経済的地位(SES)の関連を取り上げたものは、Mcneilly-Choque et al. (1996)のみである。彼らは、241名のアメリカの4, 5歳児を対象に調査を実施し、家庭のSESの高低で、子どもが顕著に示す攻撃行動の形態に違いがあるかどうか調べている。その結果、SESの高群は関係性攻撃を高く示し、低群は直接的ないじめ行動を高く示していた。この調査結果は、SESの高低による家庭での社会化のパターンの違いが、関係性攻撃の発達に影響を与えていることを示唆している。

4. 個人差要因

関係性攻撃に関連する個人差要因を調べたものとしては、関係性攻撃を示す子どもの認知、情動、社会的スキル、友人関係が主に研究されている。

(1) 認知的側面

攻撃行動を制御するメカニズムとして、認知的要因に注目した研究が、いくつか報告されている。

Kaukiainen, Bjorkqvist, Lagerspetz, Osterman, Salmivalli, Rothberg, and Ahlbom (1999)は、10

歳児, 12歳児, 14歳児を対象に仲間評定による調査を実施し, 間接的攻撃と社会的インテリジェンス, 共感性の関連について調べている。社会的インテリジェンスは, 対人認知, 社会的柔軟性, 社会的目標の達成, 行動的結果の4つの観点から構成されており, 例えば, 「人のうそをすぐ見破る」「人と上手くやることができる」「どんなことでも説得して人にやらせることができる」などといった項目を含んでいた。また, 共感性には「困っている級友を助ける」「人の成功を喜ぶことができる」などの項目が含まれていた。その結果, 間接的攻撃と社会的インテリジェンスとの間に有意な正の相関が見いだされた。それに対して, 身体的攻撃と言語的攻撃では, 社会的インテリジェンスとの間に有意な相関は見られなかった。また, 共感性に関しては, いずれの攻撃行動との間にも有意な負の相関が得られた。Kaukiainen et al. (1999)は, 間接的攻撃を実行するには, 攻撃の意図を上手く隠す必要があると同時に, 自分の行動が裏目に出ないように周囲の人の反応を解釈しながら行動を調整する必要があることから, ある程度の社会的インテリジェンスが必要とされるのではないかと仮説を立てていたが, それが支持された結果といえよう。

同じくフィンランドの研究グループのOsterman, Bjorkqvist, Lagerspetz, Charpentier, Caprara, and Pastorelli (1999)は, 11, 15歳の722名を対象に質問紙調査を行い, 攻撃行動をはじめとした問題行動との関連が指摘されている外的な統制の所在と間接的攻撃との関連を調べている。その結果, 間接的攻撃と外的統制の間の相関($r = .09, p < .05$)は, 身体的攻撃と外的統制との間の相関($r = .20, p < .001$)よりも有意に弱かった。身体的攻撃は外的統制と関連し, 結果を自分でコントロールできないと考えやすい。それに対して, 間接的攻撃は必ずしも外的統制とはいえないことがわかる。

以上の研究結果は, 関係性攻撃を示す子どものある種の“有能さ”を示唆するものである。しかし一方で, 関係性攻撃児の認知の歪みを明らかにした研究もある。

Crickら(Crick, 1995; Crick & Werner, 1998)は, 関係性攻撃と社会的情報処理過程(SIP)の関連について調べている。SIPモデルによると, 攻撃行動をはじめとした行動は, 1)社会的手がかりの符号化, 2)手がかりの解釈, 3)目標の選択, 4)反応へのアクセス, 5)反応の決定, 6)実行, といった6つのステップから構成されており, 攻撃児は攻撃行動をする可能性を増加させるような方法で, 一連の情報処理を行うことが知られている。現在のところ, 関係性攻撃児のSIPについては, ステップ2の手がかりの解釈と, ステップ5の

反応の決定について調べられている。

まず, ステップ2の手がかりの解釈について, Crick (1995)は, 小学校3~6年生252名に対して, 関係的な挑発場面(例: 仲間2人が被験児の呼ばれていない誕生日会について話しているのを, 偶然聞いてしまう)と道具的な挑発場面(例: 被験児が部屋の外に出ている間に, 仲間が被験児の新しいラジオを壊してしまう)の2種類の仮想場面を提示し, 仲間の意図を特定するように求めた。その結果, 関係性攻撃児は, 関係的な挑発場面で敵意ある帰属のバイアスを示し, 道具的な挑発場面ではバイアスを示さなかった。

次に, ステップ5の反応決定について, Crick and Werner (1998)は, 小学校3~6年生1166名に対して, Crick (1995)と同様の2種類の仮想の挑発場面を提示し, その場面での自分の反応として2つの攻撃行動(関係性攻撃と身体的攻撃)を評定させた。その結果, 関係性攻撃的な男子は, 道具的な挑発場面における関係性攻撃を肯定的に捉えていた。それに対して, 関係性攻撃的な女子は, いずれの場面においても反応決定のバイアスを示さなかった。関係性攻撃的な女子に反応決定のバイアスがみられなかったことについて, Crick and Werner (1998)は, 1)社会的望ましさの影響で, 関係性攻撃的な女子は実際よりも攻撃をネガティブに報告した, 2)先行研究によると, 反応決定の過程は特にプロアクティブなタイプの攻撃行動(手段的攻撃)と関連していることが報告されている。そうだとすれば, この研究で測定された関係性攻撃は, プロアクティブの性質を持っていなかったことが考えられる。すなわち, この研究で関係性攻撃を測定するのに使用された測定具が, 関係性攻撃のプロアクティブな側面を適切に捉えていなかったのかもしれない, 3)反応決定の過程は, 女子の関係性攻撃の実行とは関連していない, など3つの可能性を指摘している。

このように結果に性差はみられるものの, SIPにおける認知の歪みが関係性攻撃を生起させるものと考えられる。

(2) 情動的側面

関係性攻撃の生起に影響を与える情動について調べた研究に, Crick (1995)とCrick et al. (1998)がある。それらの研究によると, 関係性攻撃児は, 関係的な挑発場面で強く動揺し腹を立てることが明らかになっている。挑発場面で感じるこうした精神的苦痛が, 関係性攻撃の生起に影響を与えていると考えられる。

Mcneilly-Choque et al. (1996)は, 幼児241名を対象に, 関係性攻撃が“怒り”と“嫌がらせ”のどちらと強く関連するか調べている。攻撃行動を測定するた

めの仲間指名尺度に、「怒り」の項目（「ある子に対して腹を立てると、その子のお話を聞かないようにするのは誰ですか」「よく怒ったり腹を立てるのは誰ですか」と「嫌がらせ」の項目（「意地悪な子は誰ですか」「意地悪をするために悪口を言う子は誰ですか」）を加え、因子分析を行った。その結果、「怒り」の項目は関係性攻撃に負荷し、「嫌がらせ」の項目は身体的攻撃に負荷した。この結果は、幼児が関係性攻撃を怒りから引き起こされる行動（リアクティブ攻撃）であると見なしていることを示すものである。しかしながら、Mcneilly-Choque et al. (1996)が指摘しているように、この研究は、直接、攻撃児の意図を測定しているわけではないため、関係性攻撃が実際に怒りによって動機づけられているのかどうかは明らかでない。怒りに関連した情動である嫉妬や仕返しなども関係性攻撃を引き起こしている可能性がある。関係性攻撃に関連する情動については今後さらに研究が必要であろう。

(3) 社会的スキル

Sutton, Smith, and Swettenham (1999)は、「社会的スキル欠如仮説」が必ずしも全ての攻撃児（いじめっ子）に当てはまるわけではないとし、社会的疎外やうわさの流布といった間接的な形態のいじめを行うには、むしろ社会的スキルに長けている必要があるのではないかという問題提起をしている。

この問題提起を検証した研究に、磯部・佐藤（投稿中）がある。彼らは、教師評定を用いて、関係性攻撃を顕著に行う幼児の社会的スキル（協調スキル・自己コントロールスキル・教室活動スキル・社会的働きかけスキル）を調べている。その結果、関係性攻撃児には協調スキルが欠けていることが明らかになった。協調スキル（「人とゲームをしているときに、ルールに従う」「ゲームなどの活動中に、自分の順番を待つことができる」「教師の指示に従う」など）の欠如は、仲間とのいざこざの頻度を引き上げ、関係性攻撃の生起を助長すると考えられる。

なお、Crick et al. (1997)やCrick et al. (1995)でも、関係性攻撃を頻繁に行う子どもほど、向社会的行動を行わないという結果が得られている。このような結果は、関係性攻撃の生起に、仲間とのポジティブな相互作用の欠如が関連していることを示唆している。

(4) 友人関係

関係性攻撃と友人関係の関連を扱った研究では、次のようなものがある(Grotper & Crick, 1996; Lagerspetz et al., 1988; 三島, 1997)。例えばLagerspetz et al. (1988)は、11, 12歳児を対象に仲

間集団の構造の性差を調べた結果、女子の仲間集団は男子の仲間集団と比較して、集団の構成人数が少なく、二人ペアが多いことを見出した。そして、こうした女子の狭い仲間集団の構造が仲間同士の関係を情緒的に重要なものにしており、間接的攻撃の機会を増加させているのではないかと指摘している。

Grotper and Crick (1996)は、小学校3～6年生315名を対象に質問紙調査を実施し、関係性攻撃児の友人関係の質について調べている。その結果、関係性攻撃児は、彼らの友人関係を、親密性や排他性が高いと知覚していた。また、関係性攻撃児の友人は、彼らの関係においては、衝突、裏切り、関係性攻撃が頻繁に生起し、排他的であることが要求されると報告していた。この結果は、関係性攻撃が親密性と排他性の高い仲間集団の中で生起していることを示唆している。なお、身体的攻撃児とその友人は、彼らの友人関係は親密性が低く、グループ外の子どもに対して頻繁に身体的攻撃を行うと回答していた。このように、関係性攻撃は仲間集団内で行われ、身体的攻撃は集団のメンバーによって外部の子どもに対して行われるという結果は、わが国のいじめ研究でも得られている知見である（児童生徒の問題行動等に関する調査研究協力者会議, 1996; 立正大学いじめ対策研究会, 1997）。

では、関係性攻撃は仲間集団内において、どのような子どもによって行われているのであろうか。畠山 (2000)は、年中児34名を行動観察し、Clique内の地位別の攻撃数を検討した。その結果、女兒において、相互選択数の最も多い子ども、すなわち仲間集団内で中心的な子どもが、関係性攻撃を頻繁に行っていた。この結果から、関係性攻撃には、集団の中心的存在である子どもが、その影響力を利用して行う行動という側面があることが示唆される。

5. 適応問題

関係性攻撃と適応との関連を検討した研究では、仲間地位（仲間受容・拒否）、内面化行動問題、外面化行動問題の3つが適応状態の指標として取り扱われることが多い。それらの研究では、関係性攻撃が身体的攻撃と同様に、子どもの不適応の重要な予測因であることが確かめられている。

関係性攻撃と仲間地位の関連を扱った研究には、次のようなものがある。Crick et al. (1997)は、幼児65名（3歳5ヶ月～5歳5ヶ月）を対象に調査を行い、関係性攻撃と仲間地位との関連を相関分析によって明らかにしている。その結果、関係性攻撃を頻繁に示す幼児ほど、仲間から拒否されていた。同様の結果は、

Mcneilly-Choque et al. (1996)によっても得られている。これらの結果は、関係性攻撃は幼児期から仲間拒否の予測因となることを示している。また、Crick and Grotpeter (1995)は、小学校3～6年生491名を対象に調査を実施し、関係性攻撃とソシオメトリック地位（平均児・人気児・拒否児・無視児・敵味方児）との関連を調べている。その結果、敵味方児（仲間からの拒否も受容も高い子ども）は、関係性攻撃を最も多く示していた。また、拒否児（仲間からの拒否が高い子ども）は、敵味方児の次に関係性攻撃を多く示していた。Coie, Dodge, and Kupersmidt (1990)によると、敵味方児は他の地位の子どもよりも仲間と積極的に関わる子どもである。彼らは、攻撃的な子どもであるが、集団のリーダー役としてもみられていることが指摘されている。こうした地位の子どもが関係性攻撃を多く示すという結果は、示唆に富んでいる。

次に、関係性攻撃と外面化行動問題との関連について検討した研究では、磯部・佐藤（投稿中）が、幼児を対象に調査を実施している。その結果関係性攻撃を顕著に示す幼児は、不注意・多動行動（注意散漫である、そわそわしたり落ち着きがない、など）を有意に多く示すことを明らかにしている。また、Crick (1997)は、小学校3～6年生において、関係性攻撃児は外面化行動問題（よく言い争いをする、悪いことをしても罪の意識を感じない）を高く示すことを報告している。

最後に、関係性攻撃と内面化行動問題との関連について検討した研究からは、以下のことがわかっている。Crick et al. (1997)は、幼児において、教師に関係性攻撃を頻繁に行うと見られている女兒ほど、落ち込んだ様子（悲しそうにしている、あまり笑わない、など）を示していることを明らかにしている。しかし、男児では同様の相関関係はみられなかった。一方で、磯部・佐藤（投稿中）は、関係性攻撃を顕著に示す幼児は、男女ともに不安・引っ込み思案行動（寂しそうにしている、悲しそうであったりふさぎ込んだりする、など）を有意に多く示すとしており、内面化行動問題の性差については一貫した結果は得られていない。またCrick and Grotpeter (1995)は、関係性攻撃を高く示す児童は、抑うつ感を高く感じており、特に女子は、孤独感や孤立行動が高く、仲間から受容されていないと知覚していた。関係性攻撃児は仲間はずれや無視をする側であるので、これらの結果は、一見、矛盾した結果に思われる。しかし、1) 関係性攻撃児の多くは仲間から拒否されていること(Crick & Grotpeter, 1995), 2) 関係性攻撃児は一方で関係性攻撃を頻繁に受けている(Crick & Bigbee, 1998) ことから、以上の結果は説明されると考えられる。

なお、Crick (1997)では、関係性攻撃は内面化行動問題と外面化行動問題の両方と関連していたが、身体的攻撃は外面化行動問題とのみ関連していた。したがって、関係性攻撃児と身体的攻撃児の抱える適応問題には、共通する部分もあるが（仲間拒否や外面化行動問題）、異なる部分もあり（内面化行動問題）、関係性攻撃に独自に関連している適応問題について検討していく必要があるだろう。

6. 今後の課題

関係性攻撃を行う子どもについての体系的な研究はまだ始められたばかりであり、残された課題は多い。ここでは、次の3点を今後の課題として指摘したい。

第1に、長期にわたる縦断的研究を実施することによって、関係性攻撃の発達プロセスを明らかにする研究が必要である。特に、長期的な縦断的研究を通して、関係性攻撃の個人内の持続性や発達に伴う関係性攻撃の内容の変化、適応との関連について明らかにされることが期待される。

第2に、これまでみてきたように、数々の研究によって関係性攻撃の原因や発達には独自の要因が影響していることが示されている。したがって、従来の攻撃行動の理論的・実証的モデルを考え直す必要があると思われる。例えば、関係性攻撃に含まれる仲間はずれや無視などは、加害者に同調する周囲の子ども達の影響も小さくないことが予想されることから、仲間集団の構造や集団力学を視野に入れたモデルが必要であると考えられる。

最後に、これからの研究課題として、もうひとつ述べておきたいのは、関係性攻撃を行う子どもに対する介入研究が今後なされていかなければならないということである。関係性攻撃児に対する援助方法として期待できるものとしては、攻撃的な子どもへの援助方法として近年注目されている社会的スキル訓練(SST)があげられるであろう。また、関係性攻撃児には認知の歪みがみられることから、社会的情報処理過程モデルをベースにした介入をSSTと組み合わせて実施することによって、介入の効果を高めることができるかもしれない。さらに、関係性攻撃児を対象とする介入は、個別か集団のどちらで実施するのがより効果的であるか、介入のタイミングは幼児期が最適なのか、それとも関係性攻撃の増加する小学校高学年以上がより適しているのかといった問題も検討されなければならないだろう。

引用文献

- 朝生あけみ・斉藤こずゑ・荻野美佐子 1991 いざこざ場面における2～3歳児の方略 日本教育心理学会第33回総会発表論文集 93-94.
- Bjorkqvist, K., Osterman, K., & Kaukiainen, A. 1992. The development of direct and indirect aggressive strategies in males and females. In K. Bjorkqvist & P. Niemela (Eds.), *Of mice and women-aspects of female aggression*. pp. 51-64. Academic Press.
- Coie, J. D., Dodge, K.A., & Kupersmidt, J. B. 1990. Peer group behavior and social status. In S. R. Asher & J. D. Coie (Eds.), *Peer rejection in childhood*. pp. 17-59. New York : Cambridge University Press.
- 山崎 晃・中澤 潤 (監訳) 1996 子どもと仲間の心理学—友だちを拒否するころ— pp. 14-62. 北大路書房
- Cairns, R. B., Cairns, B. D., Neckerman, H. J., Ferguson, L. L., & Garipey, J. 1989. Growth and aggression: Childhood to early adolescence. *Developmental Psychology*, **25**, 320-330.
- Crick, N. R. 1995. Relational aggression: The role of intent attributions, feeling of distress, and provocation type. *Development and Psychopathology*, **7**, 313-322.
- Crick, N. R. 1997. Engagement in gender normative versus nonnormative forms of aggression: Links to social-psychological adjustment. *Developmental Psychology*, **33**, 610-617.
- Crick, N. R., Bigbee, M, A. 1998. Relational and overt forms of peer victimization: A multiinformant approach. *Journal of Counseling and Clinical Psychology*, **66**, 2, 337-347.
- Crick, N. R., Bigbee, M, A., & Howes, C. 1996. Gender differences in children's normative beliefs about aggression: How do I hurt thee? Let me count the way. *Child Development*, **67**, 1003-1014.
- Crick, N. R., Casas, J. F., & Mosher, M. 1997. Relational and overt aggression in preschool. *Developmental Psychology*, **33**, 579-588.
- Crick, N. R., & Grotpeter, J. K. 1995. Relational aggression, gender, and social-psychological adjustment. *Child Development*, **66**, 710-722.
- Crick, N. R., Werner, N. E. 1998. Response decision processes in relational and overt aggression. *Child Development*, **69**, 1630-1639.
- Crick, N. R., Werner, N. E., Casas, J. F., O'Brien, K. M., Nelson, D. A., Grotpeter, J. K., & Markon, K. 1999. Childhood aggression and gender: A new look at an old problem. In Bernstein, D. (Ed), *Nebraska symposium on motivation*. pp. 75-141. Lincoln: University of Nebraska Press.
- Feshbach, N. 1969. Sex differences in children's modes of aggressive responses toward outsiders. *Merrill Palmer Quarterly*, **15**, 249-258.
- Feshbach, N., & Sones, G. 1971. Sex differences in adolescent reactions toward newcomers. *Developmental Psychology*, **4**, 381-386.
- Galen, B. R., & Underwood, M. K. 1997. A developmental investigation of social aggression among children. *Developmental Psychology*, **33**, 4, 589-600.
- Grotpeter, J. K., & Crick, N. R. 1996. Relational aggression, overt aggression, and friendship. *Child Development*, **67**, 2328-2338.
- 児童生徒の問題行動等に関する調査研究協力者会議(編) 1996 児童生徒のいじめ等に関するアンケート調査結果 文部省初等中等教育局
- 磯部美良・佐藤正二 投稿中 幼児の関係性攻撃と社会的スキル
- 畠山美穂 2000 幼児の攻撃行動のタイプに関する研究—自然観察法から— 広島大学教育学部紀要, **49**, 417-424.
- 神村栄一 1997 いじめ動機を喚起する被害生徒の諸特徴といじめの内容 第3回「健康文化」研究助成論文集, 38-47.
- Kaukiainen, A., Bjorkqvist, K., Lagerspetz, K., Osterman, K., Salmivalli, C., Rothberg, S., & Ahlbom, A. 1999. The relationships between social intelligence, empathy, and three types of aggression. *Aggressive Behavior*, **25**, 81-89.
- Lagerspetz, K. M. J., Bjorkqvist, K., & Peltonen, T. 1988. Is indirect aggression typical of females? Gender difference in aggressiveness in 11- to 12-year-old children. *Aggressive Behavior*, **14**, 403-414.
- 松尾直博 2000 社会的不適応児に対する支援 堀野 緑・濱口佳和・宮下一博 (編) 子どものパーソナリティと社会性の発達 北大路書房 216-227.
- Mcneilly-Choque, M. K., Hart, C. H., Robinson, C. C., Nelson, L. J., & Olsen, S. F. 1996. Overt and relational aggression on the playground: Correspondence among different informants. *Journal of Research in Childhood Education*, **11**, 47-67.
- 三島浩路 1997 対人関係能力の低下といじめ *Bulletin of the school of education*, Nagoya Univer-

- sity, **44**, 1-32.
- Olweus, D. 1993. *Bullying in the schools: What we know and what we can do*. Blackwell, Oxford.
- 松井賓夫・角山剛・都築幸恵訳 1995 いじめ こうすれば防げるーノルウェーにおける成功例 川島書店
- Osterman, K., Bjorkqvist, K., Lagerspetz, K, M, J., Charpentier, S., Caprara, G, V., & Pastorelli, C., 1999. Locus of Control and three types of aggression, *Aggressive Behavior*, **25**, 61-65.
- 立正大学いじめ対策研究会 1997 小中高校時の「いじめの実態とその対策に関する研究」 石橋湛山記念基金研究助成費研究成果報告書
- Rys, G.S., & Bear, G. G. 1997. Relational aggression and peer rejection: Gender and developmental issues. *Merrill-Palmer Quarterly*, **43**, 87-106.
- Sutton, J., Smith, P. K., & Swettenham, J. 1999. Bullying and 'Theory of Mind' : A critique of the 'Social Skills Deficit' view of anti-social behavior. *Social Development*, **8**, 117-134.

(主任指導教官：松田 文子)